

質的意識の表象説

太田 紘史

序 意識の質的特性

意識には様々な側面があり、それには例えば自覚や自己認識といったものや、随意的であること、また覚醒状態であることなどが含まれるだろう。だが近年の哲学の議論で重要視されているのは、意識の質的特性 (qualitative character) あるいは現象的特性 (phenomenal consciousness) である。その特徴づけとして有名なものは、「ある経験をすることとはどのようなことか (what it's like to have an experience)」というものだ (Nagel, 1974)。それは、例えばバラを見るときの色の感じ、ビールを飲むときに口内に感じられる微妙な質感、頭痛の際のズキズキする痛みを感じた、感覚的狀態に伴う主観的な質である。このように質的特性は、典型的には感覚・知覚的な経験において感じられる質である。

この質的特性は物理主義にとって深刻な障害になるかもしれないと、多くの哲学者は考えている。というのも、どうしてこういった質的特性が物理・機能的な脳や身体に備わっているのかが分からないからだ。緑を見るときの私の脳内にあるのは、一連の物質的素材から構成される因果的メカニズムの働きだけである。そういったメカニズムのうちには、緑の質的な感じというものは見当たらない。実際、脳を構成するのは、灰色の皮質と白色の髄質である。ならば、なぜ

こういった素材やそれで実装されるメカニズムが、緑の質的な感じを実現するようになるのか、説明できないように思われる。これがいわゆる「説明ギャップ」という問題である (Levine, 1983)。もちろん、これは物理主義に対する決定的な反駁とはならない。というのも我々には、説明なしの同一性を主張するという選択肢があるからだ (e.g. Papineau, 2002)。だが、こういったアイデアがどれほどもっともなものかは、必ずしも明らかでない。

これに対して、こういった意識の側面を (物理主義の枠内に収まる仕方でも) むしろ積極的に説明しようとするアイデアの一つが、「表象説 (Representationalism; Representational Theory)」という哲学理論である。本稿は表象説を検討するとともに、それを支持するための一つの理論的戦略を提案したい。第一節ではまず、表象説の概要を描くとともに、それが物理主義的な形而上学に収まることを示す。第二節では、表象説への基本的な反論とそれに対する代表的応答を描き、それを通じて適切な形態の表象説を示唆する。第三節では、シンプルな表象説が帰結する「質外在主義」の問題を検討しながら、その問題を克服する一つの戦略を提案したい。

一 質的意識の表象説

一・一 表象説の概要

表象説とは、意識経験はある種の表象だという主張である (Harman, 1990; Tye, 1995; Dretske, 1995; Lycan, 1996; Byrne, 2001)。一般に、意識は表象的であり、それゆえ志向的対象をもつ。例えば、私がリンゴを見るとき、その視覚経験はリンゴについてのものであり、その視覚経験はリンゴに関する何かを伝えている。また私が音楽を聞くと、その聴覚経験は音楽についてのものであり、その経験は音楽に関する何かを伝えている。このように意識は常に世界について何かを伝えている。それゆえ、意識はある種の表象であるとするのがもっともらしい。これが、意識の表象説の基本的な主張である。

この点だけを見れば自明に見えるが、表象説の重要な点は、意識という表象の性質 (property) と内容 (content) を区別することにある。表象の性質とは表象媒体の特徴であり、表象の内容とは表象対象の特徴である。そして、表象の性質と表象の内容は一般に一致しない。例えば、テーブルの上のリンゴが赤いことを文で表象する際、「テーブルの上のリンゴが赤い」と黒のフォントで記述することができる。ここで、表象の性質 (記述に用いたフォントの黒さ) と表象の内容 (リンゴの赤さ) は一致する必要がない。このような表象の性質と内容の不一致は、語や文のような記号的表象に限られない。その不一致は、絵画的な表象にも当てはまる。例えばユニコーンの絵は、ユニコーンを表象する。ここで、絵が表象するユニコーンは四本足であるが、絵そのものは四本足ではない。この例においてもやはり、表象の性質 (絵そのものの、四本足ではないという特徴) と表象の内容 (ユニコーンの、四本足であるという特徴) は一致しない。このように表象の性質とその内容を区別することこそが、意識の表象説にとって重要である。意識が志向的対象を持つということに着目し、意識をある種の表象として理解するのならば、意識の性質と内容を区別しなければならない。では、それらは具体的にはどういったものだろうか。

第一に、意識の性質について考えてみよう。一般に表象の性質とは表象媒体の特徴であるので、意識の性質はその媒体の特徴、すなわち脳の特徴である。それゆえ意識の性質には、脳の物理的性質 (灰色であることや特定の化学物質群から構成されているといった特徴) や機能的性質 (因果的役割を果たすメカニズムとしての特徴) が含まれることになる。第二に、意識の内容について考えてみよう。一般に表象の内容とは表象対象の特徴であるので、意識の内容はその表象対象の特徴、すなわち外的世界の特徴である。それゆえ意識の内容には、世界の性質 (例えば、バラの赤さや匂いや形や重さなど) が含まれることになる。

このように二つを区別すると、我々は質的特性をどのように位置づけるべきかを理解できる。質的特性は、意識の性質ではなく内容である。我々がバラの赤さを感じる時、それは意識されている赤である。言葉を換えれば (表象説の

もとは)その赤さは表象されている赤、すなわち意識という表象の内容である。この赤さは決して、意識という表象の性質、すなわち媒体たる脳の特徴ではないのだ。こうして表象説によれば、質的特性は意識の性質(表象媒体の特徴)ではなく内容(表象対象の特徴)なのである。我々はときに、感じられる赤さといった質的特性が自分のものだと考える。それは世界の特徴ではなくて、意識する側の我々がもっている特徴だと我々は考えることがある。だが表象説によれば、これは誤った考えである。我々は脳と身体から構成される存在者であるかぎり、質的特性はそういった脳や身体の特徴(性質)ではない。むしろそれは、脳と身体が表象する、世界の特徴(内容)である。

このような考えをさらに支持する根拠となるのが、いわゆる意識経験の「透明性(transparency)」である(Harman, 1990; Tye, 2002)。我々は意識経験の対象にアクセスするが、意識経験そのものにアクセスすることは一般にはできない。というのも例えば、私がリンゴを見ると、私はそのリンゴの赤さや丸さを感じる。ここで、私がいくら内観的な注意を働かせたところで、リンゴの赤さや丸さは変化せず、それ以上の質が視野に現れることはない。このとき私は、リンゴがどのようなものかについては視覚的にアクセスするが、リンゴを見るという視覚経験がどのようなものかについて視覚的にアクセスしているわけではない。というのも、私はリンゴが赤く丸いことを見るのであって、それを見ることをしているわけではないからだ。このように、意識経験そのものの質にアクセスしようとしても、それは常に対象の質へと通り抜けてしまう。このように意識経験はいわば透明であり、我々はそこで現れる対象にアクセスすることしかできない。したがって、リンゴの赤さといった質的特性は、意識経験そのものの特徴ではなく、経験の対象の特徴である。すなわち、質的特性は意識の性質ではなく内容なのだ。

以上が表象説の概要である。このような表象説は、質的特性を説明する理論としてしばしば提案されている。だが、その説明力は、いったい何に由来するのだろうか。私は次のように提案する。それは、まさに意識の質的特性の担い手を同定していることによる。すなわち、意識的な存在者の質的特性を、それ自体では意識的ではない存在者の性質に尽

くされていると提案するからだ。我々の質的特性についての説明ギャップは、先述のとおり、質的特性（緑の質）を担うものが脳の物理的性質（緑を見るとき脳の状態の物理機能的特徴）のうちに見当たらないというものだ。そのため、この緑の質は脳の物理的性質に追加された性質であるという考えが動機づけられる。だが表象説によれば、緑の質が脳内に見つからないのは当然である。なぜならそれは、意識という表象の性質（媒体たる脳の特徴）ではなく、内容（表象された対象の特徴）だからである。

だが、この説明はまだ完全なものではない。たしかに、質的特性は表象内容として同定され、その担い手は見出された。だが、そもそも意識を表象として同定するとき、この表象という担い手がどういったものなのか、まだ明らかになっていない。ここで、もしも表象とは何かという問いに対して、その本性は意識であると答えてしまうと、説明は成功しない。それは、意識について循環的な記述を与えるものにならないからだ。それゆえ我々は、意識に訴えないような、しかも物理主義的な描像に収まるような、表象についての理論を手に入れる必要がある。

一・二 表象に関する理論

表象に関する自然主義的な理論は、様々な論者によって提案されている。もちろん自然主義的な理論だからといって物理主義的であるとは限らないが、ここで挙げるようなものは、実質的に物理主義の形而上学の枠内に収まるものである。つまり、物理的なもので実装可能なものによって表象を説明するのだ。

表象に関する有名な理論が、因果的共変説 (Causal Covariance Theory) である (Fodor, 1990; c.f. Dretske, 1981)。それによれば、表象Rが対象Oを表象するのは、RトーションがOによって引き起こされるときである。例えば、ある脳状態Bがイヌを表象するのは、Bがイヌによって引き起こされるときである。

この考えは、物理主義の枠内に収まる考えである。因果的共変説によれば、心的表象の差異のあるところには常に因

果的共変の差異がある。ここで、因果的共変の差異のあるところには常に物理的差異があると考えれば——つまり物理的なものの因果的閉包が成り立つとすれば (Cf. Papineau, 2002) ——、心的表象の差異のあるところには常に物理的差異があることになる。こうして、心的表象についての物理主義を支持することができる。もちろんこれは、因果的共変説が物理主義を証明するということではない。むしろそれは、因果的共変説が物理主義に反しないということだ。それは、因果的共変説が物理主義にとって利用可能であるということの意味しているのだ。

さて、因果的共変説には有名な問題がある。それが選言問題 (Disjunctivity Problem) である。例えば照明条件などが悪ければ、先ほどの脳状態 B は、イヌだけではなくイヌによく似たもの (例えばオオカミ) によっても引き起こされてしまうだろう。我々は、そういう脳状態はオオカミをイヌとして誤って表象しているのだと言いたい。だが上記の見解に従えば、B は (イヌ or 特定条件でのオオカミ) を表象しているということになってしまう。なぜなら、B を引き起こすのがイヌまたは特定条件でのオオカミだからだ。誤るということは表象の最も基本的な特徴の一つだが、因果的共変説は誤表象というものを不可能にしてしまう。このように、本来の表象対象以外のものも含めた対象の選言を表象対象としてしまう問題が、選言問題である。

この点を補う仕方として、大きく分けて二通りの方針が考えられる。第一は、目的論的機能 (teleological function) に訴えるものである。それによれば、表象 R が対象 O を表象するのは、R が O と因果的に相互作用するような目的論的機能を有しているときである (Dietsche, 1995)。この仮説のもとでは、B がイヌを表象する目的論的機能を持つようなものである限り、それはイヌを表象する (そしてオオカミを誤表象する) と言える。第二は、非対称的依存性 (asymmetrical dependency) に訴えるものである (Fodor, 1990)。それによれば、B がイヌを表象する (そしてオオカミを誤表象する) と言えるのは、オオカミによる B の例化が、イヌによる B の例化に (いわば) 寄生しているからである。すなわち、まずイヌによる B の例化という因果的システムが確立されており、それに依存する形でオオカミによる B の例

化が可能になるのである。これは正確に言うと、次のようになる。

Bの例化においてXがYに非対称的に依存している \S (1)もしYがBの例化を引き起こさないなら、XもBの例化を引き起こさない、そして(2)もしXがBの例化を引き起こさないとしても、YがBの例化を引き起こさないとは限らない。

いずれのアプローチにせよ、それはやはり表象を物理主義的形而上学の枠内に収める。なぜなら明らかに、前者のアプローチにおける目的論的機能も、後者のアプローチにおける非対称的依存性も、物理的なもので実装可能だからである。そして、表象説は意識を表象によって説明することを思い出そう。もしもその説明が成功すれば、あとは(上記のアプローチに沿って)表象を物理的なもので実装すればよい。そうすることで、我々は物理主義を支持することができる——物理的なものに表象的なものが付随し、表象的なものに意識が付随する。

さて、残された問題としてはもちろん、表象説が反駁されずに生き残るかどうかだ。以下では表象説に対する反論として比較的難しいものを検討しながら、⁽¹⁾表象説がどのように修正・洗練されるかを検討したい。

二 表象説への反論と応答

二・一 逆転地球からの反論と応答(および表象に関する理論について)
 表象説を反駁しようとする有名な論証が、ブロック(Block, 1990)の「逆転地球(Inverted Earth)」の思考実験に基づく論証である。

逆転地球とは、この地球とそっくりな複製である。逆転地球上の人々や物体は、地球に住む人々や物体とそっくりの複製である。例えば、あなたのそっくりな複製もそこにはいるわけだ。だが一点異なるのは、そこにあるすべてのものが、地球上の物体と逆転した色をもつということだ。例えばバラの花は緑色で、草原は真っ赤であり、空は黄色で、

バナナは青色である。さらに、逆転地球人の色についての言語はひっくり返っている。そのため彼らは逆転地球上で、バラを指して「赤だ」、草原を指して「緑だ」、空を指して「青い」、バナナを指して「黄色い」と言う。

さて、地球人のT氏が地球の家で眠っている間に、悪意ある科学者が彼を拉致してしまう。そしてT氏の眼に、可視光線の波長をちょうど逆転させるようなコンタクトレンズが挿入される。そしてT氏は、逆転地球上のT氏の対応者の家に戻される。翌日T氏は目を覚ますが、彼は何にも気づかず、これまで通りの生活が続ける。なぜなら、逆転地球上のものは色が逆転しているものの、T氏の眼に挿入されたコンタクトレンズが、それらの逆転した色を再び逆転させてしまうからだ。さらに、彼は逆転地球人たちと会話するとき、互いに「バラは赤いよね」と語りあって同意する。なぜなら、逆転地球人の色言語は地球人のそれと逆転しているからだ。

ブロックは、この思考実験に基づいて、表象説を次のような仕方でも反駁しようとする。まず、T氏は移住後の生活において、逆転地球上の様々な物体表面を視覚的に表象している。例えば、彼は逆転地球上のリンゴを見ると、緑色の、リンゴ表面を表象している。というのも、彼は逆転地球上で緑色のリンゴを追跡しているからだ。それゆえ彼の視覚的表象の内容は緑である。だが、彼にはその視覚経験において、赤が見えている。このように、彼の視覚経験の質的特性(赤)は、その表象内容(緑)と異なっている。それゆえ、経験の質的特性は表象内容とする表象説は誤っている。このようにブロックは結論する。

タイ(Tye, 1998)はこれに対していくつかの応答方針を示している。それは大きく分けて、二通りに分けられる。ひとつは、(直観の通りに)質的特性は変わらないが、(直観に反して)表象内容も変わらないとするものである。それゆえ質的特性は表象内容と同一である。この応答方針を第一応答と呼ぼう。もうひとつは、(直観の通りに)表象内容は変わるが、それとともに(直観に反して)質的特性も変わるとするものである。それゆえ質的特性は表象内容と同一である。この応答方針を第二応答と呼ぼう。

私は第二応答のほうが、より多くの直観を救うと考えるので、これを紹介したい。この応答は結局、逆転地球上での表象の振舞いは、素朴に考えられる通りのものではないというものである。つまり、逆転地球上での赤経験が、依然として地球上での赤対象を表象する——そう最終的に言えればよい。タイは第二応答のための二種類の戦略を提案しつつ、結局はそのうちの片方を放棄する。

第二応答の一つ目の戦略は、表象の条件に目的論的要素を導入する手法である。これを「第二応答 (TELEO)」と呼ぼう。それによれば、ある表象が特定対象を表象するのは、それを表象する目的論的機能をもつようなときである。目的論的機能とは、自然選択による設計が「意図」する機能である。それゆえ、T氏が逆転地球上でリングを視覚的に呈示されるとき、そこで例化される彼の視覚状態は、それが表象するように設計されているもの、すなわち地球上のリングを表象する。なぜなら、彼の視覚状態は地球の環境やそのうちの物体を表象するように、自然選択によって設計されたものだからだ。

だが「第二応答 (TELEO)」は、「スワンプマン」を考慮に入れるときに問題になる (Davidson, 1987)。スワンプマンとは、まったく偶然的な分子の集合で出現した人間である。そして議論のために、それはちょうどあなたの物理的複製になつているとしよう。スワンプマンにおいて重要なのは、それが生じるようになった進化的な歴史的経緯を持たず、また意図をもった設計者によって設計されたわけでもないという点である。それゆえ、それはいかなる目的論的機能も持たない。さて、もしも表象の条件に目的論的要素を含めるのなら、スワンプマンは一切の表象を持っていないということになる。これは、単に表象の帰属の問題として見るならば、それほど問題ではないものがあるかもしれない。だが我々の関心にとっては重要な問題が生じる。というのも、意識の表象説が正しいならば、そして表象に目的論的要素が必要ならば、目的論的機能を欠いたスワンプマンには質的意識がないということになる。⁽²⁾ だが、これはきわめて反直観的であるので避けられるべきだとタイは論じる。また私には、人間の端的な物理的複製であるスワンプマンが現象

的な意識を欠いているというのは物理主義の基本的テーゼに反すると思われる。そのため、やはりこの応答は避けられるべきであると私は考える。

第二応答の二つ目の戦略は、表象を非対称性依存性の観点から特徴づける方法である。これを「第二応答ASYMMETRY」と呼ぼう。先ほど説明した通り選言問題の解決策の一つは、非対称的依存性に訴える。タイは逆転地球の問題にこのアイデアを利用する。

まず、地球と逆転地球での、対象と経験の因果関係は次のようなものである。地球では赤い物体が赤経験を引き起こすが、逆転地球では緑の物体が赤経験を引き起こす。これらを略記のために、【地球上の赤対象↓赤経験】、【逆転地球上の緑対象↓赤経験】、というふうに表現しよう。さて、タイはこれらの因果関係について次のように診断する——

【逆転地球上の緑対象↓赤経験】は、【地球上の赤対象↓赤経験】に非対称的に依存する。理由は次の通りである。

一方で、【地球上の赤対象↓赤経験】が成り立たない状況が生じたとき、例えば、地球でT氏は目や視覚神経系に障害を負うのだ。そのとき、T氏が例の手続きを経て逆転地球に移動するとき、【逆転地球上の緑対象↓赤経験】は成り立たない（彼は目が見えないのだ）。だが他方で、その逆は必ずしも真ではない。というのも、【逆転地球上の緑対象↓赤経験】が成り立たないような状況が生じたとき、例えば、例のコンタクトレンズがT氏の眼から外れてしまふのだ。しかしその場合でも、地球に帰還したとき、依然として【地球上の赤対象↓赤経験】が成り立つのは明らかである。このように、逆転地球での因果関係は、地球上での因果関係に、非対称的に依存すると言える。

さて、以前に述べたとおり表象の因果的共変説では、ある表象の表象対象は、非対称的に依存されている因果関係における原因である。例えば、ある脳状態Bが（イヌor特定状況でのオオカミ）ではなくイヌを表象するのは、【特定状況でのオオカミ↓B】が【イヌ↓B】に非対称的に依存しているからである。この理論に基づいて、タイは次のように言う——T氏は、逆転地球で緑対象に目を向けるとき、地球上の赤対象を表象する。なぜなら、【逆転地球上の緑対象

↓赤経験】が、【地球上の赤対象↓赤経験】に非対称的に依存しているからである。これがタイの提案する応答である。

二・二 身体感覚からの反論と応答（および経験の非概念的 content について）

表象説へのまた別の有名な反論は、身体感覚に訴えるものである。視覚や聴覚などの知覚経験は、確かに様々な世界内の対象を表象していると言えるかもしれない。だが、痛みのような身体感覚の場合はどうだろうか。第一に、痛みの経験は何かを表象しているようには思えない。第二に、ズキズキする痛みと刺すような痛みは明らかに質的に異なるが、その差異に対応するような表象的な差異があるようには思われない (cf. Block, 1996)。

こういった疑問に対してタイ (Tye, 1995, 2000) は、表象説の立場から応答する。第一の疑問についてタイは、痛みの経験は実際に表象内容をもつとする。それは、身体損傷を表象しているのである。さらにタイは第二の疑問にも答えよう。ズキズキする痛みの経験は、身体（表面ではなく）内部の損傷を表象する——しかも明確な空間的境界を持たないような損傷として、そして徐々に始まり次第に終わるような損傷として表象する。そして刺すような痛みの経験は、はつきりとした身体領域において突然始まるような身体損傷を表象する。こうして、身体感覚の質的差異に対応して、表象内容の差異が常に見つかるのである。

だが、そうだとすると次のような疑念が生じる。もし痛み経験が身体損傷を表象するとしても、それと同じものを視覚的にも表象できるのではないだろうか。例えば手にケガを負ったとき、手に痛みを感じるが、同時に手にケガを負っていることを見て知ることもできる。ここで、手のケガの痛覚経験と視覚経験は明らかに質的に異なっているが、それらは同様に手のケガを表象している。この質的差異に対応する表象的差異はないことになり、それゆえ表象説は誤っているはずだと反論される (Block, 1996)⁽³⁾。

これに対してタイは次の考えに基づいて応答する——意識の表象内容は一般に、非概念的 (non-conceptual) である⁽⁴⁾。

我々は、意識によって表象される質を概念化しない。例えば、我々は視覚経験で見えている視野範囲のすべてを概念的に追跡することはできない。視野には様々な色が様々な仕方分布しているが、それらを概念化して同定・識別することはできない。色サンプルには赤や赤²⁹といったものがあるかもしれないが、どちらかを見せられて、それを赤²⁹として概念化することはできない。このように意識の質的特性は、その非概念的な内容である。そうタイは論じる。

タイはこの考えに基づいて、先ほどの身体感覚の問題に答える。一方で、手のケガを痛覚経験によって表象するときの内容は非概念的であり、それゆえそれ特有の質的特性が呈示される。他方で視覚経験の場合は異なる。視覚経験によって、ケガをしている手の表面の色や形が非概念的に表象される。だが、手にケガを負っているのが分かるのは、その視覚経験で呈示された質的特性に基づいて判断したおかげである。そして一般に判断は、概念的なものである（つまり、感覚ではなく思考の一種である）。このように身体損傷は、痛覚経験では非概念的に表象されているが、視覚経験では非概念的には表象されていない。それゆえ、痛覚経験においてのみ、特有の質的特性が呈示されるようになる。こうして痛覚経験と視覚経験の質的差異には、それに対応する表象的な差異があることが分かり、表象説は擁護される。

三 表象説の問題

三・一 内在主義的表象説と外在主義的表象説

以上のような、もっぱらタイによる表象説の擁護は適切なものだと私は考える。だが、表象説にはまだ問われるべき問題がある。それは、経験の表象内容の本性に関するものである。

すでに述べたとおり表象説によれば、意識はある種の表象であり、質的特性はその表象内容だ。だが内容には、二種類のものがある。それは一般に「狭い内容」と「広い内容」に分けられる。狭い内容は個体の内部状態に依存する内容であり、広い内容は環境に依存する内容だ。表象説は、質的特性は表象内容だとするが、これはさらに二つに区別され

る。「内在主義的表象説 (Internalist Representationalism)」は、質的特性を狭い表象内容と同一視する。「外在主義的表象説 (Externalist Representationalism)」は、質的特性を広い表象内容と同一視する。

シンプルな表象説は、外在主義的表象説である。それは、質的特性を経験の広い内容、すなわち経験によって表象されている対象の特徴だとする。(私がここまで扱ってきた表象説も、実は外在主義的表象説である。) 実際、タイ (Tye, 2000) やライカン (Lycan, 2001) といった表象説の有力な提案者たちは、外在主義的表象説を支持する。そして彼らが自覚する通り、その一つの帰結が、質に関する外在主義である。というのも外在主義的表象説によれば、色経験で感じられる色の質は経験の広い内容である。そして、広い内容は世界の存在者から構成される。それゆえ、感じられる色の質は世界に備わっているはずだ。これが質の外在主義である。結果として色の質は、誰に見られることがなくても世界に存在するということになる。

この方向の議論は、表象説の説明上の戦略としては、不適切なものではない。表象説が質的特性を適切に説明すると言えるのは、質的特性の担い手を示すからである。だが、外在主義的表象説は、他の感覚様相について反直観的な帰結をもたらす。例えば、この方針を痛覚経験に適用するならば、次のようなことになる。痛みの質は世界に備わっている。結果として痛みの質は、誰にも感じられることがなくても世界に存在するということになる。

だが、色の質が物体表面に塗られているとしても、痛みの質が身体部位に塗られているようにには思われない。色の質が物理的性質として存在するとしても、痛みの質が物理的性質として存在するということは、幾分反直観的である。もちろん、これは表象説を反駁するような議論ではない。表象説の支持者は、生の事実として痛みの質はそういったものなのだと応答できる。質的特性は身体損傷と同一であるのは生の事実であり、それについて説明はない、と。だがこのような応答は、表象説の意義を失わせてしまう。というのも表象説はそもそも、質的特性を説明する理論なのである。だが目下の応答では、説明なしの生の事実が引き合いに出されてしまっている。これでは、質的特性と脳の物理的性質

の間の説明なき同一性を——まさに生の事実として——提案する立場と、説明力において差異がない。それならば、我々は最初から説明なき同一性を主張しておけばよく、あえて表象説を採用する動機がなくなってしまう。

すると、質外在主義を帰結しない内在主義的表象説がもっともらしく思われてくる。だがこれもやはり、表象説の説明上の利点を損なってしまう。というのも、外在主義的表象説が説明上成功すると思われるのは、それが質的特性の担い手を、環境内の表象される対象の特徴として同定したからである。だがもしも外在主義的表象説でなく内在主義的表象説が正しいのならば、質的特性の担い手を、環境内の表象対象ではなく、表象する脳のうちに見出さなければならぬ。だがこれは、脳のうちに緑の質の担い手がないという説明ギャップの問題を再燃させてしまう。ここで、もちろん脳状態と緑の質は生の事実として同一なのだと論じることができよう。だがそれはやはり、先ほどと同じようにして、表象説の動機を失わせる。⁽⁵⁾

結局、痛みに関する直観は、表象説を困難に追い込む。まず、表象説が説明上有効であるのはなぜか。それは、表象説が外在主義的表象説の形をとり、質の担い手を脳内ではなく環境内の表象対象に見出すからである。そしてそれは、経験の質が感じられなくとも環境に存在するということ（質外在主義）を含意する。だがこの考えは、痛みの質が感じられなくとも環境（身体表面や身体内部も含めて）に存在するということを含意する。これに対して外在主義的表象説は、それを生の事実として受け容れるように要請できる。だが、それは表象説の動機を損なう。ここで、外在主義的表象説に代えて内在主義的表象説を提案すれば、質外在主義は回避される。だがそのとき、緑の質が脳内に見つからないという説明ギャップが再燃する。ここでも緑の質と脳状態が生事実として同一なのだと論じることができるとは、やはりそれは表象説の動機を損なう。

三・二 量的不足としての質的特性(1)基本の方針

ここに、形状の視覚能力において無限の力をもった存在者がいたとしよう。彼は、世界のあらゆる物理的対象の構造を、一目でスキャンし判別できるのだ。例えば、目前の物体がほぼ等しい内角をもつ三三角形であることを、まさにそのようなものとして見てとることができる。彼は、それが三三角形であること、そしてその第一の角度はコレコレで、第二の角度はコレコレであるといったことをすべて見てとることができる。さらに彼に尋ねると、それはもちろん近似的な表現にすぎなくて、その形状の一つの辺と思われるものも、本当は自分にはギザギザに見えるのであって、そのギザギザの第一角度はコレコレで、第二角度はコレコレで……といった認識をすることができる。だがある日、彼は眠っている間にこの能力を失ってしまい、常人程度の視覚能力になってしまう。そして目を覚ましたとき、そこには先ほどと同じ物体が置かれていた。彼は驚いてこう語る。「これは角をもたない物体じゃないか！ むしろそれは、角をもつたものではなく完全な円のように見える。だが、物理的世界には完全な円はないはずだ。そうだとすると、結論は一つしかない。私が眠っている間に、私の視覚のうち、非物理的な円が追加されたのだ。」だが実際に起こっていることは、円形という性質が追加されたのではなく、むしろ対象についての視覚状態における情報処理能力の欠如にすぎない。

さて今度は、物体表面をスキャンする無限の視覚能力を持った存在者がいたとしよう。彼は世界のあらゆる物理的対象の表面のミクロレベルの構造を、一目でスキャンし判別できるので、それのおかげで彼は、目前の物体が特定の光反射特性の分布をもち、そして特定波長の光を反射していることを、まさにそのようなものとして見てとることができる。例えば彼は、その物体表面の特定座標点の光反射特性がコレコレであり、その隣の光反射特性がコレコレであるといったことをすべて見てとることができる。だがある日、彼は眠っている間にこの能力を失ってしまい、常人程度の視覚能力になってしまう。そして目を覚ましたとき、そこには眠る前にスキャンしたのと同じ物体が置かれていた。彼は驚いてこう語る。「これは光反射特性をもたない物体じゃないか！ むしろそれは、反射特性を持ったものではなく、何か

量的に表現できないもの、質としか言えないようなものに見える。私が眠っている間に、私の視覚のうちに、非物理的な質が追加されたのだ。」だが実際に起こっていることは、色の質という性質が追加されたのではなく、むしろ対象について自身の視覚が運ぶ情報の欠如にすぎない。

我々は、色の「経験される質」ということで何を意味しているのだろうか。それは「量的なものとしては経験されていない」というものであれば、我々は思ひのほかたやすくそれを物理的なもので実現できる。それは、経験に新たな性質を追加するのではなく、量的な経験の不足によって手に入るようなものだ。これを「量的不足としての質」と呼ぼう。量的不足としての質は、第一に、世界に向けられた経験における質の役割を果たすことができる。例えば、我々はそれを経験することによって、目の前のリングが熟していることを見てとり、それを手に取り食べるという適切な行動をとることができる。我々は無限の視覚能力をもたなくとも、そういった視覚的な認識やそれに基づく行為を十分にこなせるのだ。また第二にそれは、内観的経験における質の役割を果たすことができる。我々が自身の色経験を内観するとき、言語的に表現できない (ineffable) 性質が見えるように思われる。だが、記述不可能性は、まさに量的な表現の能力の不足によるところである。

ここで、次のような反論が挙げられるかもしれない。物体表面の反射特性には、質的なものは含まれていないはずである。それゆえ、反射特性の視覚経験から何かを差し引くことでは、色の質は得られないはずだ——そう反論されるかもしれない。

これについては次のように答えよう。まず円の場合について考えられたい。三千角形のうちには、円であるという性質は含まれていない。だが三千角形は、視覚的な能力の不足によってあたかも円のように見える。このとき、円であるという性質が視覚経験に追加されると考える必要はない。それは単に、三千角形についての視覚経験の情報処理能力が不足しているためである。そしてこのあたかも円のように見えるという事態は、円の視覚経験に関する現象学的直観を

説明するうえで十分である。

今度は、色の場合について考えよう。たしかに反射特性に質的なものは含まれていないかもしれない。だが反射特性は、視覚能力の不足によってあたかも質的なもののように見える。このとき、色の質が視覚経験に追加されると考える必要はないのだ。それは単に、反射特性についての視覚経験における情報処理能力が不足しているだけである。そしてこのあたかも質のように見えるということは、世界に向けられた色経験において果たす役割や、色の内視的経験において果たす現象学的直観を説明するうえで十分である。

三・三 量的不足としての質的特性(2)表象的分析、および内在主義的表象説の擁護

今度は、より正確に表象説の観点から上記のアイデアを洗練させたい。まず、私は次の二点を主張する。

(COLOR-1) 色の感じられた質は、色経験の表象内容に尽きる。

(COLOR-2) 色経験は、物体表面の反射特性を、反射特性として概念化可能な仕方ではなく、反射特性として概念化不可能な仕方でも表象する。

これらのうち (COLOR-1) は、表象説の基本的なテーゼである。それは色の感じられた質を、特定の表象内容と同一視する。だがこれは、次のような議論を招く。もし (COLOR-1) が正しければ、次の二通りの可能性がある。

(COLOR-1a) 色の感じられた質は、色経験の広い表象内容である。(外在主義的表象説)

(COLOR-1b) 色の感じられた質は、色経験の狭い表象内容である。(内在主義的表象説)

一方で (COLOR-1a) が正しければ、それは色の質外在主義を帰結する。他方で (COLOR-1b) が正しければ、それは色の感じられた質が経験者のうちにあることになるが、そのような質は脳内に見つからない。これは説明ギャップの再燃だ。よって (COLOR-1b) は、形而上学的テーゼとしての表象説を反駁しないものの、表象説の説明力を失わ

せる。

この議論に直面して、表象説の提案者の多くは (COLOR-1a) をとり質外在主義を受け容れようとするだろう。しかし、それは不可避の道ではない。というのも、(COLOR-1b) に関する上記の議論は誤った推論に基づいているからだ。誤っているのは、(COLOR-1b) が正しければ、それは色の感じられた質が経験者のうちに性質として存在する、という推論である。内在主義的表象説が正しく、経験の表象内容が狭い内容であるからといって、質の担い手となる新たな性質を脳内に措定する必要はない。なぜなら、質的なもののように感じられることを実現するためには、性質の追加ではなく、神経表象における情報処理能力の不足で事足りるからである。

ここで、非概念的な内容というアイデアが役に立つ。以前に見たようにタイにおいては、経験の内容の非概念的な性格は、視覚経験が色を正確に概念化できない、という事実から提案されたのである。それはまさに概念化という能力の欠如である。それは、視覚経験という表象状態が運ぶ情報が量的に概念化されないことを帰結する。上記のテーゼ (COLOR-2) は、このように非概念的な内容が情報処理能力の欠如によるものであることを示唆する。そしてこのような色経験の内容は、環境だけではなく表象者の状態にも依存するという点で、狭い内容である。このように、脳内に新たな性質を追加するのではなく、脳的能力の不足という点から、説明ギャップを再燃させない仕方内で内在主義的表象説を提案できる。では今度は、この考えを痛みに応用しよう。私は痛みについて次の二点を提案する。

(PAIN-1) 痛みの感じられた質は、痛み経験の表象内容に尽きる。

(PAIN-2) 痛み経験は、身体部位の損傷状態を、損傷状態として概念化可能な仕方ではなく、損傷状態として概念化不可能な仕方である。

これらのうち (PAIN-1) は、表象説の基本的なテーゼである。それは痛みの感じられた質を、特定の表象内容と同一視する。だがこれは、次のような議論を招く。もし (PAIN-1) が正しければ、次の二通りの可能性がある。

(QPAIN-1a) 痛みの感じられた質は、痛み経験の広い表象内容である。(外在主義的表象説)

(QPAIN-1b) 痛みの感じられた質は、痛み経験の狭い表象内容である。(内在主義的表象説)

一方で (QPAIN-1a) が正しければ、それは痛みの質外在主義を帰結する。他方で (QPAIN-1b) が正しければ、それは色の感じられた質が経験者のうちにあることになるが、そのような質は脳内に見つからない。これは説明ギャップの再燃である。もちろん我々は生の事実としてそれを質と脳状態の同一性を主張できるが、これは表象説を説明戦略ではなくしてしまい、表象説の動機を損なう。

ここで表象説の提案者は、歯を食いしばって、色の場合と同じように (QPAIN-1a) をとらうとするかもしれない。だがこれは反直観的である。さらに単に反直観的であるというだけではなく、それは結局、生の事実としての質外在主義の主張でしかない。それはやはり表象説を説明戦略ではなくしてしまい、表象説の動機を損なう。

そこで、私は (QPAIN-1b) を支持する。色の場合と同様、(QPAIN-1b) に関する上記の議論は誤った想定に基づいている。それは、(QPAIN-1b) が正しければ、それは痛みの感じられた質が経験者のうちに性質として存在する、という推論である。だが内在主義的表象説が正しく、経験の表象内容が狭い内容であるからといって、質の担い手となる新たな性質を脳内に措定する必要はない。なぜなら、質的なもののように感じられることを実現するためには、性質の追加ではなく、神経表象における情報処理能力の不足で事足りるからである。それは、(QPAIN-1b) が提案する通り、視覚経験という表象状態が色を正確に概念化できず、それゆえ痛み経験が運ぶ情報が量的に概念化されないという事実による。このような経験の内容は、環境だけではなく表象者の状態にも依存するという点で、狭い内容である。このようにして我々は、脳内に新たな性質を追加するのではなく、神経表象における情報処理能力の不足という観点から、説明ギャップを再燃させない仕方でも内在主義的表象説を提案できる。

結 語

私はここまで論じたことが正しければ、質的特性は物理主義に収まる仕方の説明できる。意識はある種の表象であり、質的特性は表象内容である。表象と表象内容は物理・機能的なものによって説明可能であり、それゆえ我々は、説明ギャップを生じさせない仕方では表象説を提案することができる。もちろんこういった試みは完全なものではない。例えば、私が何度も言及した非概念的内容というアイデアの適切さはいまだ論争のさなかにある。また実際に物理・機能的な脳がそういった表象や表象内容をいかに実装するのかについても検討する余地がある。だが少なくとも私が今回提案した表象説のアイデアは、質的意識の物理主義的な説明を与えるうえで有望な見取り図を与える、私は考える。

文 献

- Bermúdez, J. L. (2007). 'What Is at Stake in the Debate on Nonconceptual Content?', *Philosophical Perspectives*, 21, 55-72.
- Block, N. (1990). 'Inverted Earth', In J. E. Tomberlin (Ed.), *Philosophical Perspectives*, 4, 52-79.
- (1995). 'On a Confusion about a Function of Consciousness', *Behavioral and Brain Sciences*, 18 (2), 227-87.
- (1996). 'Mental Paint and Mental Latex', In E. Villanueva (Ed.), *Philosophical Issues*, 7, 19-49 (Atascadero, CA: Ridgeview Press, 1996).
- (1999). 'Sexism, Ageism, Racism, and the Nature of Consciousness', *Philosophical Topics*, 26 (1), 39-70.
- Boghossian, P. A. and Velleman, J. D. (1989). 'Color as a Secondary Quality', *Mind*, 98, 81-103.
- Byrne, A. (2001). 'Intentionalism Defended', *Philosophical Review*, 110, 199-240.
- Davidson, D. (1987). 'Knowing One's Own Mind', *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 61, 441-58.
- Dretske, F. (1981). *Knowledge and the Flow of Information*. Cambridge, MA: The MIT Press.

- (1995). *Naturalizing the Mind*. Cambridge, MA: MIT Press / Bradford Books. (トナハン・ユンギ『心を自然化する』鈴木貴之訳、勁草書房、二〇〇七年)
- Evans, G. (1982). *The Varieties of Reference*. Oxford: Oxford University Press.
- Fodor, J. (1990). *A Theory of Content and Other Essays*. Cambridge, MA: The MIT press.
- Harman, G. (1990). 'The Intrinsic Quality of Experience,' in J. Tomberlin (Ed.), *Philosophical Perspectives*, 4: *Action Theory and Philosophical Perspectives* (pp. 31-52). Ridgeview Publishing.
- Levine, J. (1983). 'Materialism and Qualia: The Explanatory Gap,' *Pacific Philosophical Quarterly*, 64, 354-61.
- Lycan, W. G. (1996). *Consciousness and Experience*. Cambridge, MA: MIT Press.
- (2001). 'The Case for Phenomenal Externalism,' *Philosophical Perspectives*, 15, 17-35.
- Nagel, T. (1974) 'What Is It Like To Be a Bat?', *Philosophical Review*, 83, 435-50. (ナゲル・トーマス『コウモリはどのように感じるのか』所収、永井均訳、勁草書房、一九八九年)
- Papineau, D. (2002). *Thinking about Consciousness*. Oxford: Oxford University Press.
- Peacocke, C. (1983). *Sense and Content*. Oxford: Oxford University Press.
- (1993). 'Review of M. Tye, *The Ingener Debate*,' *Philosophy of Science*, 60, 675-7.
- Tye, M. (1995). *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- (1998). 'Inverted Earth, Swampman, and Representationalism,' *Philosophical Perspectives*, 12, 459-78.
- (2000). *Consciousness, Color, and Content*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- (2002). 'Representationalism and the Transparency of Experience,' *Notas*, 36 (1), 137-51.

注

(一) 表象説に対する有名な反論のうち比較的扱わずやまずものは、本稿では扱わなう。例えば、ハースクティプからの反論 (Peacocke, 1983, 1993) ' 感覚様相からの反論 (Block, 1995) などについては、Lycan (1996, Ch. 7) ' Tye (2000, Ch. 4) の解答を見よ。ほやむに重視からの反論 (Boghossian & Vellman, 1989) ' 正常知覚者設定からの反論 (Block, 1999) などについては、

(2000, Ch. 4) の応答を見よ。

(2) 実際、表象説の提案者の一人であるドレッキ (Drestke, 1995, Ch. 5) は (逆転地球とは別の文脈ではあるが) その種の応答を与える。

(3) ブロック (Block, 1996) は手のケガからの反論を挙げているわけではないが、彼はこれと同種の反論を性的感覚の観点から指摘している。

(4) Tye (1995, Ch. 4; 2000, Ch. 3) を参照。また、非概念的 content というアイデアは Evans (1982) にさかのぼる。そのアイデアにまじわる論争については Bermúdez (2007) を参照せよ。

(5) ライカン (Lycan, 2001) は、次のように内在主義的表象説の動機をくじこうとするが、残念ながら彼の議論は我々の問題には関わらないように思われる。

ライカンによれば、たしかに痛み¹の質は個体の内部状態によって決まるが、だからといって外在主義的表象説が反駁されることはない。身体感覚の場合は、表象が身体外部はなく身体表面や身体内部に向けられているだけの話である。痛み¹の質が、経験の性質であるかのように思われるのは、それが経験者の身体²の性質であるからだ。だがそれは、痛み¹の質が経験の性質であることとを含意しない。むしろ、経験者の身体は (いわば) 経験する側のもではなく、経験される側のものである。それゆえ結局、痛み¹の質は経験の性質 (すなわち表象媒体たる脳の特徴) ではなく、その広い内容 (すなわち表象対象たる身体表面や身体内部の特徴) である。そう彼は論じる。

ライカンのこの議論はおかしなものではないが、それは我々の問題 (痛覚者なしに痛み¹の質が存在しうるといふことの奇妙さ) を解消するものではない。

(筆者 おおた・こうじ 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員／哲学)

Representationalism of Qualitative Consciousness

by

Koji Ota

Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo
JSPS Research Fellow

Representationalism identifies the qualitative character of consciousness with a sort of representational content. The most famous objections to this view are posed by the arguments from ‘Inverted Earth’ and bodily sensations. I will review these arguments and some responses and conclude that the arguments can be answered by modifying the ideas of representation and its content. However, it will be revealed that representationalism has an explanatory problem of how to locate the qualitative character when we attempt to characterize the representational content as either an external or an internal one. In the final part of the paper, I will address this problem by appealing to the idea of non-conceptual content in a certain manner.